

黙示録21章3節「天からの住まい」

1A 聖なる都の特徴

1B 立方体(至聖所)

2B 神殿の不在

3B 太陽の不在

2A 神の幕屋

1B 幕屋の目的

1C 共に住む所

2C 最も親しい所

2B 神の住まい

1C エデンの園

2C 会見の天幕

3C 安住した神殿

4C キリストの受肉

5C 御霊の内住

6C 主の再来

3A 住まいにあるいのち

1B 神とキリストの知識

2B いのちの書

3B 死の死による慰め

本文

黙示録 21 章を開いてください。私たちはついに、最後の永遠の姿、天のエルサレムの幻について学びます。午後に一節ずつ学びますが、今朝は 3 節に注目します。「21:3 **私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。」**これは、新しい天と新しい地が造られてから、天から、聖なる都が降りてくる時に、主が語られたことです。神の幕屋、すなわち、神の住まいが降りてきます。そして、人々と共に住むと言われます。このように近くなるので、彼らにとって神は遠い存在ではなく、自分たちの神として個人的な存在になります。そして、神も、彼らに近くなり、彼らの神となられます。

今朝は、聖書全体において、要は、神が、何を知ってほしいのか？その、とどのつまり、結論について語っています。すなわち、神はご自分のかたち、ご自分に似せて造られた者たちと共に住みたいのです。ちょうどそれは、家族が共に住んでいて一つになっているように、共に住みたいと

願われているということです。

私たちの社会で、見失われていることは、「恵みを、当たり前のこととし、それがあることにさえ気づいていない」ということでしょうか。空気について当たり前にあると思いますが、火事が起こったりして息ができなくなる時に、空気のありがたさが分かります。また肺や心臓に疾患を患えば、一回、一回の呼吸がいかに貴重かが分かります。空気という自然の恩恵、神のくださった賜物に気づき、それで神をあがめることができます。

同じように、「人と人のつながり」があります。これについて、人々は、当たり前にしてしています。そして、むしろうとうといとまで思っています。また、ちょっと嫌なことを言われたら、その人と関係を切れば良いとまで思っています。悪い意味での個人主義が蔓延しています。その結果、どうなっているのでしょうか？小中学校の自殺は去年で過去最多の 527 人だそうです。一昨年前は、不登校児童は 34 万人、引きこもりは推計 146 万人です。尋常な数ではありません。簡単に言えば、居場所がなくなっているのです。

恐ろしいことに、アマゾンの本のセクションで「孤独」と検索すると、出るわ出るわ、それが悲劇や不幸ではなく、称賛する本がずらっと出てくるのです。¹「孤独と不安のレッスン」「孤独がきみを強くする」「孤独の価値」「私の好きな孤独」などなど。しかしその中で、否定的、危機的に捉えている本もありました、「孤独の本質 つながりの力——見過ごされてきた「健康課題」を解き明かす」という題名ですね。喫煙や肥満、依存症より深刻という説明がついています。しかし、これがアメリカ人のお医者さんが書いたものです。深刻な病として捉えているのですが、日本では逆に称賛されているのです。

昨年末、身の毛がよだつようなニュースを見ました。²「人間関係リセット症候群」という言葉です。LINE など SNS での友だちの関係を一切絶つ、自分のアカウントを削除して、やり直すのです。そんな簡単にリセットするなら、そもそも、なんで友達を作るのでしょうか？友達というのと、リセットというのは反対語ですらあります。

先ほど言及された本題にある「つながり」というものが、実は神の造られた人の目的になっているのです。神の幕屋、神の住まいが降りてきて、人が神と一つになる。それが、神の救いなのです。

1A 聖なる都の特徴

1B 立方体(至聖所)

21 章に示されている、天のエルサレムの姿は、驚くべきものです。宝石の光に輝く姿はさること

¹ <https://tinyurl.com/282tqzok>

² <https://news.ntv.co.jp/category/society/0c72f220d6b34625adcf8445474acf8c>

ながら、その形状が立方体になっています。「21:16 都は四角形で、長さとは同じである。御使いが都をその竿で測ると、一万二千スタディオンあった。長さも幅も高さも同じである。」ちなみに1スタディオンを 185 ㍎で計算すると一辺が 2220 ㍎になります。地上の幕屋において、またソロモンの神殿においても、神がおられる至聖所は立方体をしていました。昔は至聖所が、垂れ幕によって聖所と仕切られており、さらに幕によって外庭と区切られ、外庭は掛け幕で外界と区別されていきました。これだけ、神のおられるところと、その外を仕切っていたのです。その中に入れるのは、大祭司が年に一度だけ、自分自身の罪のために流された血を携えていき、また香炉からの煙で覆い、主に命じられた方法で近づきます。それから、イスラエルの民のためのいけにえの血を携えます。この命令から外れたことを行えば、たちまち死んでしまいます。

そこに、聖なる主がおられるからです。預言者イザヤは、主が御座におられる栄光の姿を見て、「ああ、私は滅んでしまう。」と嘆きました(6:5)。この都にいるということは、まさに神の至聖所そのものの中にいるということになります。ここまで、神とつながれているのです。

2B 神殿の不在

そこで、天のエルサレムにないものを、ヨハネは説明しています。「21:22 私は、この都の中に神殿を見なかった。全能の神である主と子羊が、都の神殿だからである。」神殿がどこにあるのか？と、そこにいる人々は神の民ですから、思うわけです。そこで礼拝を献げたいのです。ところが、驚くべきことを発見します。神殿がないのです！でも、それは神に近づくことができないどころか、実は神ご自身の住まいの中に過ごしていたのです！神にあまりにも近づいているので、神の中にいるということに気づいていないほどでした。

3B 太陽の不在

同じように、次の言葉もヨハネは書いています。「21:23 都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」太陽がない、月もない！でも、光り輝いています。では、この光はどこからか？そうです、創世記 1 章を読めば、太陽や月を神が造られたのは第四日目です。第一日目に、光を主は造られました。そう、主ご自身の光で、都が輝いているのです。

2A 神の幕屋

ですから、この都が「神の住まい」であり、「私たちと共に神が住まう所」であります。

1B 幕屋の目的

1C 共に住む所

幕屋というのは、まさに幕で出来たところです。共に住む所です。私たちには、木や鉄筋でできた住まいがありますが、アブラハムなど族長たちは、遊牧民の生活をしていました。ですから、彼

らの住まいは天幕なのです。共に住むところであります。

2C 最も親しい所

しかも、そこはとても親しい所、親密な場であることも聖書には記されています。イサクが、お嫁さんであるリベカを自分の妻にした時に、こう書いてあります。「創 24:67 イサクは、その母サラの天幕にリベカを連れて行き、リベカを迎えて妻とし、彼女を愛した。イサクは、母の亡き後、慰めを得た。」イサクには母が亡くなっていました。そして彼女の住まい、天幕があります。幼子として、そこで時間を母と過ごしました。その親密なところに、妻リベカが入ります。そして、彼女を愛しました。それで、慰めを得ました。

雅歌においても、ソロモンの愛する妻が、このように語って、愛を示しています。「8:2 私はあなたを導いて、私を育ててくれた私の母の家にお連れして、香料を混ぜたぶどう酒、ざくろの果汁をあなたに飲ませて差し上げましょう。」彼女にとって最も親密なところに、ソロモンを連れて来ました。主は、このようなことを覚えて、神の幕屋と言われています。私たちと、霊において一つであることを願われているのです。

2B 神の住まい

1C エデンの園

ですから、聖書全体は、神の住まいから始まっています。それが創世記です。エデンの園において、主は歩いておられました。「創 3:8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である【主】が園を歩き回られる音を聞いた。」これは、主が心地よく歩いておられるという意味合いを持っています。

この園で、アダムとエバと共に住んでおられたのです。けれども、罪を犯したので彼らは隠れ、それで主は彼らを園から追い出されました。

2C 会見の天幕

しかし、主は後世に、イスラエルの民に近づかれました。彼らの宿営の只中に、ご自身と会う天幕を造るように命じられました。出エジプト記の 24 章以降に、延々と主の幕屋の設計について、設計を示されています。そして、次のレビ記では、いけにえの献げ方について、そして民数記では、幕屋を中心とする荒野の旅が始まります。そして、ヨシュアの時代には、幕屋にある契約の箱を担いで、ヨルダン川を渡りました。

3C 安住した神殿

しかし幕屋は、それ自体が移動する住まいであることを示しています。遊牧民が移動して生活するように、約束の地で、主がそこに留まることを決められる時が来ます。そうしたら、主の選ばれた場所で、神殿を建てるように命じておられました。ソロモンが神殿を建てましたが、モーセに命じら

れた幕屋の、主に二倍の大きさになっています。

そしてこの神殿が、イスラエルの背きによって破壊されました。バビロンからの帰還を果たした民が、これを再建しました。しかし、その神殿礼拝が形骸化していているという警告を、旧約聖書の最後の預言者マラキが行っていました。

4C キリストの受肉

そして神は、ご自分の住まいをキリストにあって、行われたのです。「ヨハ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」ここの、「私たちの間に住まわれた」というのは、直訳は、「幕屋を張られた」となっています。まさに、今朝の本文の箇所と同じ表現なのです。イエスご自身が肉体を取られて、人々の生活の中に共にいてくださるようになりました。そのこと自体が、神と私たちが共に住むことができるようにしてくださったのです。イエスが、そばにおられて、イエスは父なる神と一つである独り子ですから、神がともにいるのと等しいのです。

そして神殿で、牛や羊のいけにえを献げる代わりに、それらいけにえが指し示していた事、それがキリストご自身がいけにえとなり、血を流すということを果たしてくださいました。

5C 御霊の内住

そして、主はよみがえられ、天に昇られました。それから、もうひとりの助け主、聖霊を遣わしてくださるのです。この方が信じる者の中に住んでくださることによって、私たちが神殿となっているのです。「Ⅰコリ 3:16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。」

ですから、私たちは積極的に、礼拝に関わるべきなのです。私たちが信仰をもって神に近づき、祈り、みことばを聞き、聖餐にあずかる時に、聖霊が働いてくださり、ちょうど旧約時代の聖徒たちが、神殿において見た、神の栄光の姿を、私たちは自分たちの間で知るのです。

6C 主の再来

そしてイエスは、再び来られます。それが何のためか？ともにいるためです。主は弟子たちに言われました。「ヨハネ 14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」主が戻ってこられる動機も、天に私たちが共に住むことができるように、というもののなのです！

3A 住まいにあるいのち

1B 神とキリストの知識

このようにして、私たちは神とキリストを知ります。その知識は、いわゆる共に住む、親しい間柄にある、「知っている」ということです。そして、ここにこそ、いのちがあるのです。主が父なる神に祈られたことを思い出してください。「ヨハ 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」知ることが、永遠のいのちなのです！永遠のいのちというと、今のいのちが永遠に続くというような見方をする人が多いです。そうではありません。神の御子を知っているということ、この方と共にいるということ、そこに永遠のいのちがあるのです。そのつながりにこそ、いのちがあります。

2B いのちの書

そして、先週学びましたが、主を知っている、また知られているという関わりの中で、私たちの名が、この方のいのちの書に書き記されています。私たちのことを知っているということで、書き記されている書です。その書に記されている者は、第二の死を味わうことなく救われるのです。

3B 死の死による慰め

このようにして、いのちが与えられていると、私たちには苦しみがなくなります。神の幕屋が降りてきたことによって、死が過ぎ去ったことを教えています。「21:4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

そうです、神の幕屋が与えられて、それで死そのものが過ぎ去るのです。私たちが、どれほど、神を知っているでしょうか？キリストにあって親しくしているでしょうか？そして、キリストにあって互いがつながりあっているでしょうか？ここにこそ、いのちがあるのです。